

枚方市

淀川河床遺跡(その1)
(確認) 03 - 1

－牧野北町地区淀川高規格堤防整備事業に伴う
埋蔵文化財(確認)発掘調査報告書－

2003年10月

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

枚方市は大阪府下の東部において南北に長い旧河内国内の最北に位置し、西を淀川に、東を京都府境に、南を寝屋川市と交野市に接しています。地形的には、生駒山地の北端から北西に向かって広がる枚方丘陵で、その丘陵中を天野川や穂谷川などが下刻して谷を形成して淀川に流入するところです。

当市は百済からの亡命王族の子孫で奈良時代の聖武朝の重臣であった百済王氏の本貫地であり、その氏寺であった百済寺跡は国の特別史跡として指定されています。また往古より大阪と京都の中間にあって水運・陸運の要所だったため、上述以外にも著名な遺跡が数多く所在しており、文化財の豊富な地域と言えるでしょう。

淀川河床遺跡は、淀川の河原に様々な時代の遺物が分布する遺跡です。縄文や弥生時代の土器や石器、平安時代の瓦、中世の土師器や瓦器などが収集されてきており、周辺に集落などが営まれたのだらうと推測されてきました。この度この遺跡の隣接地で高規格堤防（スーパー堤防）整備事業が計画されるに伴い、本センターが遺跡の広がりを確認する調査を行うことになりました。その成果は本書に示す通りで、中世に水田が経営され、現代に至って小学校が建設されるまでの経過を地中に見出すことができました。このことは、地域の歴史を考える上で貴重な資料を提供したと考えます。

最後に調査にあたってご指導とご協力をいただいた大阪府教育委員会、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所、地元自治会、枚方市役所の各位に感謝の意を表しますとともに、今後とも本センターの文化財事業にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年10月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は大阪府枚方市牧野北町地先所在の淀川河床遺跡（その1）（確認）03-1発掘調査報告書である。
2. 調査は高規格堤防建設に伴い、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の委託を受け、大阪府教育委員会指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査は、本センター中部事務所調査第一係係長 辻本武、専門調査員 小野亜由美を担当者として、2003年6月18日から同年9月30日までおこなった。引き続き整理作業を、2003年10月1日から同年10月31日まで実施した。
4. 現場撮影は調査担当者が、遺物撮影は主査片山影一がおこなった。
5. 調査の実施および報告書の作成にあたっては、関係諸機関をはじめ堀江門也、阪田育功、井西貴子（以上大阪府教育委員会 敬称略）のご指導・ご援助を賜った。記して感謝の意を表する。
6. 発掘調査ならびに整理作業では、以下の方々に参加、協力を得た。（五十音順）
池滝千寿子、喜田真澄、高田泰子、西村奈津、山本香織
6. 本書の編集実務は辻本・小野がおこない、文責は目次に記した。
7. 出土遺物ならびに調査・整理の過程で作成した資料類は、本センター中部事務所にて保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図に付された北方位は、すべて国土座標第VI座標系の座標北を示す。
2. 国土座標は、調査時に用いた世界測地系で表記した。
3. 本書で用いる標高はすべて東京湾平均海面を基準とするもので、図中では原則的にT.P.+を省略した。
4. 本書で利用した土壌色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」2002年度版を使用した。
5. 土器実測図は、陶磁器を断面黒塗りとした。
6. 写真図版中の（ ）内の数字は遺物実測図内の数字に一致する。

目次

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経過……………(辻本) 1

第2節 位置と環境……………(小野) 2

第2章 調査成果

第1節 調査の方法……………(辻本) 4

第2節 層序……………(小野) 4

第3節 調査成果……………(小野) 6

第4節 表採遺物……………(小野) 9

第3章 まとめ……………(小野) 11

挿図目次

図1 調査地と澁川河床遺跡(その1～3)

図2 周辺遺跡分布図

図3 トレンチ配置図

図4 トレンチ南壁断面図

図5 1トレンチ第I-1面平面図

図6 2トレンチ第III-2面平面図

図7 2トレンチ第III-5面平面図

図8 3トレンチ第I-1面平面図

図9 3トレンチ第I-3面平面図

図10 3トレンチIII-1面平面図

図11 3トレンチIV-1面平面図

図12 出土遺物

図13 表採遺物

図版目次

図版1 1. 調査地全景

2.1 トレンチ第I-1面(北から)

3.1 トレンチ第II層断面(北東から)

図版2 1.2 トレンチ第II層断面(北東から)

2.2 トレンチ第III-2面溝完備状況(西から)

3.2 トレンチ第III-5面唾呼検出状況(西から)

4.2 トレンチ第IV層断面(北から)

図版3 1.1 トレンチ第I層出土 土人形

2.1 トレンチ出土遺物(2～4:第I層、5～7:第III層、8～13:第IV層)

3.2 トレンチ出土遺物(14:第III層、15～17:第IV層)

図版4 1.3 トレンチ出土遺物(18:第I層、19～21:第II層、22～24:第III層)

2. 表採遺物

4.1 トレンチ第I-2面(北から)

5.1 トレンチ第IV層断面(北東から)

5.3 トレンチ第I・II層断面状況

6.3 トレンチ第III-1面足跡(拡大)

7.3 トレンチ第III-1面唾呼検出状況(北から)

8.3 トレンチ第IV層断面状況(北東から)

第1章 調査にいたる経緯

第1節 調査に至る経過

淀川は、京都の南山城地域を流れる木津川と琵琶湖を源流とする宇治川、丹波亀岡から流入する桂川の三河川が京都府八幡市付近で合流して、大阪府北東部を北東から南西に向かって大阪湾に流れ出る河川である。この川は古来氾濫を繰り返し、周辺に水害の脅威をもたらしてきた。明治時代には、オランダから招聘したデ・レーケや西洋土木技術を学んだ沖野忠雄らによって大規模な治水工事が行われ、以降改修の努力が積み重ねられてきた。

国土交通省淀川河川事務所では、さらにいっそうの治水対策とあわせて、良好な街づくりを目指す高規格堤防（スーパー堤防）整備事業を企画した。枚方市牧野北町所在の北牧野小学校跡地において当事業の施工を予定したところ、その隣接地に淀川河床遺跡（その1）という著名な遺跡が周知されていた。

大阪府教育委員会は、遺跡が当事業予定地にまで広がる可能性があるとして淀川河川事務所と協議を重ねた結果、遺跡の有無および遺跡であるとすればその範囲と深度を確認するための発掘調査を行うこととなった。淀川河川事務所は府教委の指導に従って、(財)大阪府文化財センターにこの確認調査を委託した。本センターは委託契約を締結して、平成15年6月より3箇所の調査区を設定し現地盤より5mまで掘削する調査を実施した。調査は順調に進行し、同年9月に現地調査を終え、引き続き整理・報告書作成事業を行なった。

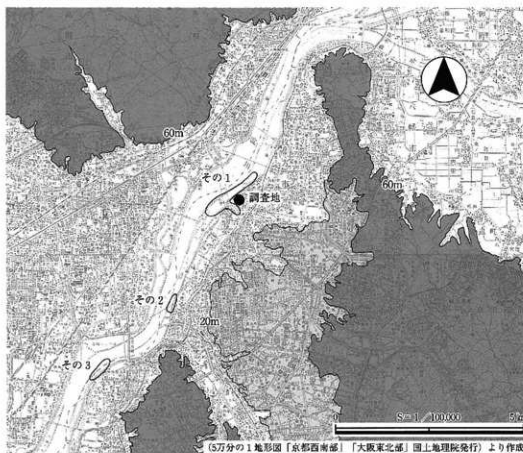


図1 調査地と淀川河床遺跡（その1～3）

第2節 位置と環境

淀川河床遺跡が所在する枚方市は、東方の生駒山系から舌状にのびる丘陵・台地と、淀川に面した幅2km前後の沖積平野（淀川低地）に大きく分けられる。市域の大部分は、淀川に面するように張り出した男山丘陵と枚方丘陵、これらの丘陵に囲まれた標高20～60mの交野台地によって占められ、淀川低地との境界は、数m以上の段丘崖が形成されるところが多い。そして、東方より船橋川・穂谷川・天野川の3河川が、丘陵・台地をほぼ東西に横切って淀川に注ぎ込む。これらの河川は、平素は水量が少ないが、豪雨時には氾濫する天井川である。淀川に面した標高5～7mの一带は淀川低地と呼ばれる沖積平野で、ここには島状に微高地が点在していたらしく、現在も下島・上島・磯島などの字名が残っている。

今回調査地は穂谷川右岸の河口付近に位置し、淀川河床遺跡（その1）に隣接する。淀川の河川敷では古来より、遺物が採集されており、現在では枚方市二軒屋浦・下島・阪地先、磯島、出口付近をそれぞれ淀川河床遺跡（その1）、（その2）、（その3）とし、遺物散布地として認識されている（図1）。特に磯島周辺は、縄文海進時の海岸線がこの付近にまで達していたこともあって、旧石器・縄文時代の海沿いの集落が営まれていたことが想定されている。

次に、穂谷川流域の歴史的環境を概観する。

旧石器・縄文時代 この時代の遺跡は、市内でも穂谷川上流域に集中する。旧石器時代の遺物は、穂谷川上流の丘陵（高位段丘）上で藤坂宮山遺跡・津田三ツ池遺跡・津田トツバナ遺跡、交野台地で交北城ノ山遺跡があるほか、淀川低地では小倉東遺跡で舟底形石器が出土している。縄文時代の遺物は、交北城ノ山遺跡で後晩期の埋壺や石剣・石棒などが出土している。また船橋川右岸の低地では、船橋遺跡で縄文時代の遺構が見つかった。

弥生時代 穂谷川右岸招提中町遺跡で前期新段階のピット群が見つかった。なお、船橋遺跡や淀川河床河床（その2）で前期に相当する土器が出土している。招提中町遺跡は中期前半には引き続き30基以上の方形周溝墓が作られ、対岸の交北城ノ山遺跡とともに中期中頃まで継続する。交北城ノ山遺跡では40数基の方形周溝墓群とともに、竪穴住居址が検出されている。中期後半には、丘陵上の長尾谷町遺跡・田口山遺跡で集落が形成される。後期後半から古墳時代初頭には再び台地・低地上に集落が広がり、招提中町遺跡・養父丘遺跡・船橋遺跡など、遺跡数が増加する。

古墳時代 北河内における前期古墳は天野川上流に集中し、当時の勢力がこのあたりにあったことがうかがえる。穂谷川周辺では中期になってから古墳が築造される。国指定史跡である牧野車塚古墳は、全長107.5mの前方後円墳で、二重の濠が確認されている。宇山1号墳は、横穴式木室と木棺直葬を並列してもつもので、銅部に銀象嵌文様のある直刀や鏝など鉄製品が副葬されていた。ほかに、後期の古墳として阪古墳・比丘尼塚があり、小倉東遺跡でも数基みつかった。この古墳群には鉄製品を副葬しているものがある。集落遺跡では、小倉東遺跡で前期の竪穴住居や掘立柱建物がみつかったほか、宇山遺跡・九頭神遺跡で古墳時代後期の掘立柱建物が検出されている。船橋遺跡では、後期の土坑が見つかった。

古代 律令期の枚方市域は、河内国交野郡・茨田郡に編成されていた。今回調査地の周辺は交野郡に相当する。集落跡は、九頭神遺跡・招提中町遺跡などで飛鳥時代の竪穴住居が検出されており、小倉東遺跡で、奈良時代前期の土師器甕棺や平安時代前期の埋壺が出土している。招提中町遺跡でも引き続き、

奈良時代・平安前期の遺構が見つかった。また、低地の船橋遺跡では、奈良時代前期の掘立柱建物5棟以上や奈良時代末から平安時代の遺構が見つかった。平安時代以降、枚方市域は「交野ヶ原」と呼ばれるようになる。皇族・貴族の遊行の地、すなわち「禁野」とされる。この地を本拠地としていた、百済王氏が建立した百済寺や禁野本町遺跡をはじめとする周辺の遺跡では、多くの掘立柱建物が見つかった。生産遺跡では、飛鳥時代に操業していた楠葉・平野山瓦窯、平安京西寺の瓦を供給したことで知られる飯瓦窯がある。また、須恵器生産は、先述の楠葉・平野山瓦窯で瓦生産と兼業されたことに始まる。7世紀前半には、藤坂・山田周辺で、枚方窯群として成立し、8世紀まで操業した。中・近世 平安末より鎌倉時代にかけて、引き続き集落が営まれている船橋遺跡や、鎌倉末頃から室町時代前半の宇山遺跡があげられる。また、栗倉瓦窯は鎌倉時代に操業していた瓦窯である。式内社である交生神社は、豊臣期に大坂城の鬼門鎮護のために、豊臣秀吉、秀頼によって再興されており、今でも当時の意匠を凝らした建築様式を伝える社殿が残っている。

現在の枚方市中心地付近に位置する枚方宿は、京都と大坂の中間地点にあたることから、宿場町として栄えた。当時、舟で往来する人々に食事を提供した際に利用された「くらわんか碗」は、淀川河川敷周辺でよく収集されている。また、宇山遺跡でも、江戸時代後期から明治時代の遺物・遺構が見つかった。

江戸時代には河川整備の技術も進み、天井川である穂谷川はほぼ現在の川筋と変わらないようになる。淀川に関しても、京都と大坂を結ぶ京街道とともに重要な交通路として、整備が進んだ。しかし、大きな洪水に見舞われることも多く、このため穂谷川の下流は川筋を変更することもあったようである。したがって穂谷川下流域に位置する今回の調査地も、たびたび洪水の被害をこうむったり、河川の変更による影響を強く受けている。

参考文献

財団法人 枚方市文化財研究調査会 1985

『小倉東遺跡』

枚方市史編纂委員会 1986 『枚方市史』

大阪府教育委員会 2002 『招提中町遺跡』



調査地

- 1 安養寺石造高僧
- 2 楠葉瓦遺跡
- 3 楠葉南遺跡
- 4 船橋遺跡 (船橋塚寺)
- 5 養父遺跡
- 6 招提寺内村遺跡
- 7 比呂尼塚古墳
- 8 養父古墳群
- 9 養父瓦遺跡
- 10 養父古墳群
- 11 宇山2号墳
- 12 宇山1号墳
- 13 宇山遺跡
- 14 牧野飯遺跡
- 15 牧野飯瓦遺跡
- 16 牧野飯古墳
- 17 片笠神社本殿
- 18 九頭神道跡 (九頭神鹿寺)
- 19 招提中町遺跡
- 20 招提今池遺跡
- 21 日置山
- 22 交北城/山遺跡
- 23 牧野塚古墳
- 24 小倉東遺跡
- 25 小倉遺跡
- 26 アベクラ遺跡
- 27 牧野塚古墳群
- 28 栗倉瓦遺跡
- 29 津遺跡
- 30 清水遺跡
- 31 御殿山遺跡
- 32 田口中高遺跡
- 33 甲斐田新町遺跡
- 34 出原飯西遺跡
- 35 中宮池之宮古墳群
- 36 禁野本町遺跡
- 37 中宮尾寺田遺跡
- 38 百済寺遺跡
- 39 中宮ドンパ遺跡
- 40 上牧遺跡
- 41 萩政遺跡
- 42 淀川河床遺跡 (その1)

図2 周辺遺跡分布図

第2章 調査成果

第1節 調査の方法

調査対象地は、淀川およびその支流の穂谷川に由来する沖積地と考えられる場所で、遺構があるとすればかなり深くなると予想された。当センターにおけるこれまでの沖積地調査の経験から、G.L.-5mまで掘削すれば、遺構遺物の確認は可能であると判断した。

対象地は小学校の跡地で、すでに校舎等は取り壊されていた。その基礎部分は地下に大きな影響を与えているので、そうでないと考えられる運動場および中庭であった場所に80m程の間隔を置いて、3箇所の調査区を設定し、南より1トレンチ・2トレンチ・3トレンチとした。

調査区は5×5m、深さ5mの規模のものとして、長さ9.5mの鋼矢板Ⅲ型を打設した。機械掘削した後、人力による掘削を進め、G.L.-1mと-3mの深さで腹起しを入れて調査の安全を図った。調査は順調に進行し、所定の深度に達して調査を終了した。

なお当該調査地は淀川河床遺跡（その1）という周知の遺跡に隣接する。この遺跡は今でも遺物が散布しており、様々な時代のものが収集できる。当該調査でも大いに関係するので、表面採集した遺物を報告したい。

第2節 層序

調査時は、各トレンチで検出した面順に任意の数字を用いたが、本報告ではⅠ～Ⅳまでの4つの層にわけ、さらに細分が可能であればⅠ-1、Ⅰ-2と枝番をつけた。なお、現代の盛土は第0層、盛土を除去した最初の層は第Ⅰ層とした。また、層の上面は第Ⅰ-1面、第Ⅱ-1面というように表記する。

第0層 昭和30年代の小学校建設時のものと思われる盛土。各トレンチで約2mあった。

第Ⅰ層 細砂～粗砂混じり粘質土層。各トレンチで2～3層に細分でき、足跡や溝を検出した。近現代の旧耕作土層である。

第Ⅱ層 細砂～粗砂までの砂礫層とシルト層。ラミナもみられ、洪水堆積層である。

第Ⅲ層 (1トレンチ) 青灰色粘土～シルト層の4層に細分できた。層界の乱れや、生痕が確認できた。自然堆積層である。

(2・3トレンチ) 粘土ブロック混じりの粘土～シルト層。5層に細分でき、それぞれの上面で溝や畦畔を検出した。中世の耕作土層である。

第Ⅳ層 粘土～細砂混じりのシルト層で2～3層に細分した。生痕が確認できた。自然堆積層である。

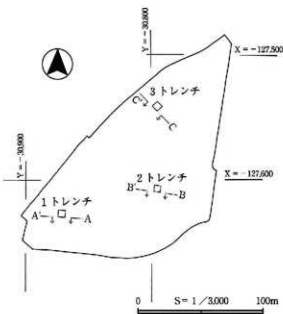


図3 トレンチ配置図

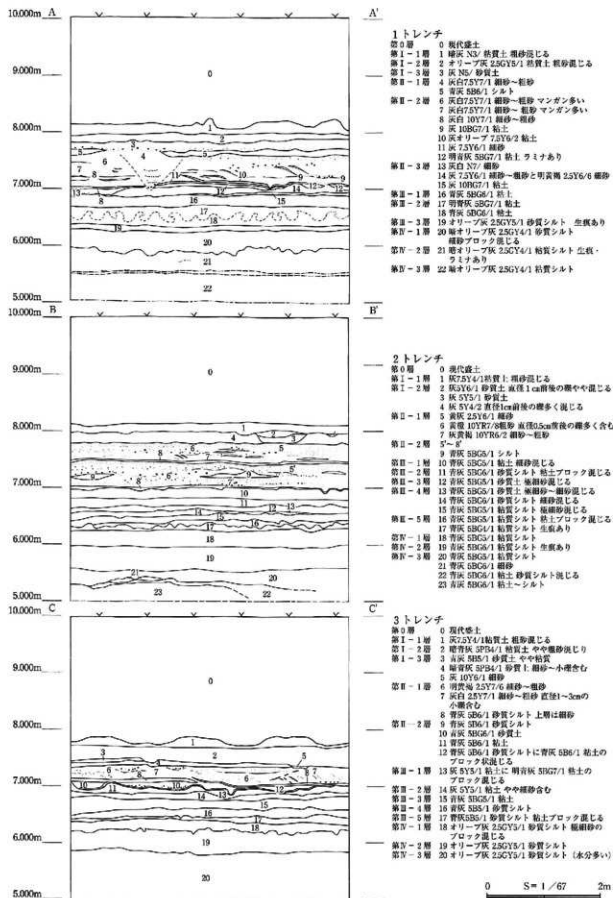


図4 トレンチ南壁断面図

第3節 調査成果

1.1 トレンチ

このトレンチは調査地でもっとも南に位置し、穂谷川河口に近い。

第Ⅰ層 (T.P. +7.75~8.10m) 細砂を含む灰色粘質土層。第Ⅰ-1面では、北東方向に軸をとる溝2本とこれに直交する溝が1本、そして東西方向の畝溝が数条みつかった。盛上されるまでの耕作にともなう溝であろう。第Ⅰ-2面では人間の足跡が数個みつかった。この層からは、土人形・近世以降の陶磁器類をはじめ、現代までの遺物が出土した。土人形(図12-1・図版3-1)は、内裏あるいは天神を模したもので、型抜きで成型し素焼きにする。高さ2.5cmの小形品である。陶磁器は、くらわんか碗・産地不明の碗・蓋などがある(図版3-2~5)。

第Ⅱ層 (T.P. +6.85~7.75m) 灰色・明黄褐色の細砂~粗砂までの砂礫層と、3枚のシルト層がある。シルト層から上に向かって、細砂から粗砂へと粒子が粗くなる。これを1つの単位とし、第Ⅱ-1、Ⅱ-2、Ⅱ-3層の3つ単位に分けた。第Ⅱ-2・3層の最下層であるシルト層にはラミナがみられ、第Ⅱ-2層上層の砂礫層では斜交層理が発達している。いずれも洪水堆積層で、土壌化していないことから、短期間のうちに堆積したものであろう。また、V字状の溝を断面で確認した。

第Ⅲ層 (T.P. +6.10~6.85m) 青灰色粘土~砂質シルトの3層に細分した。第Ⅲ-2層では、土色の異なる粘土層の層界が乱れている。つまり、下層が火災状に巻き上がったところに、上層が落ち込んでいる状況を断面で観察した。これは、すでに水中で堆積した2つの層が、非常にやわらかい状態であるときに、外からなんらかの影響を受けたことが考えられ、地震の痕跡を示す可能性がある。第Ⅲ-3層では土器が細片で出土し、生痕がみられた。遺物は、楯葉型Ⅱ~Ⅲ段階の瓦器碗、口禿の白磁片があり、13~14世紀の年代を想定した(図版3-6~8)。

第Ⅳ層 (T.P. +5.00~6.10m) オリーブ灰色粘質シルト層。第Ⅳ-1層は細砂がブロック状に混じっており、第Ⅳ-2層が攪拌されてきた層であると思われる。第Ⅳ-2層はラミナ状の細砂や生痕がみられた。第Ⅳ-2・3層の間には、時間が経過すると幅3、4cmの帯状に暗色化する部分があり、ここでは有機物が堆積していたと考えられる。遺物は楯葉型Ⅰ~Ⅱ段階瓦器碗・口縁部がやや「ㄇ」字状に屈曲する土師器皿・黒色土器B類碗などの細片が出土し、11~12世紀に相当すると思われる。

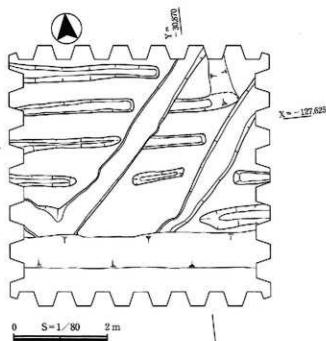


図5 1トレンチ第Ⅰ-1面平面図

2.2 トレンチ

2 トレンチは調査区のほぼ中央に位置する。

第Ⅰ層 (T.P. +7.80~8.10m) 細砂混じり灰色粘質土と砂質土。第Ⅰ-2面では、断面より土坑状の遺構がみられたが、ほかに遺構は検出できなかった。近現代の旧耕作土層。

第Ⅱ層 (T.P. +7.00~7.80m) 灰色・黄灰色・黄褐色の細砂~小礫の砂礫層と2枚のシルト層で形成される洪水堆積層である。1 トレンチと同様に、シルト層から上に向かって、粒子の細かい砂から大きい砂へと堆積している。土器がほとんど出土せず、長さ60~70cm・直径約4cmの樹木の枝の先端を尖らせた杭が1本出土した。

第Ⅲ層 (T.P. +6.20~7.00m) 青灰色粘土~シルトと砂質土の5層に細分した。第Ⅲ-1面で、人間の足跡列を数列検出した。これはほぼ南北方向に進むので、トレンチ内全域で確認した。第Ⅲ-2面 (T.P. +6.80m) では、東西方向に軸をとる小溝を5条検出した。幅は約20cmである。耕作にともなう溝であろう。第Ⅲ-3面 (T.P. +6.40m) では、東西・南北方向に伸びる畦畔を検出した。畦畔は幅約40mで、生痕が入る砂質シルト層で形成される。この畦畔に伴う耕作土には、こぶし大の粘土ブロックが混入していた。

このように、第Ⅲ層では、耕作にともなう遺構が数面にわたって確認できた。遺物は中世の瓦器・土師器の細片がある (図12-3・図版3-14)。

第Ⅳ層 (T.P. +5.00~6.20m) 青灰色粘土~シルト層。第Ⅳ-2層は、粘質シルト層で、下方に向かって10~20cmまで伸びた生痕が観察された。第Ⅳ-3層は、細砂混じりのシルト層で生痕がまったくみられない。遺物は土錘 (図12-4・図版3-17)・土師器がある。4は袋網系の有溝土錘で、この形態は平安時代以降に瀬戸内海沿岸などで用いられたものである。ほかに黒色土器A類椀底部や瓦質三足釜の足 (図版3-17) が出土しており、12~13世紀に相当すると思われる。

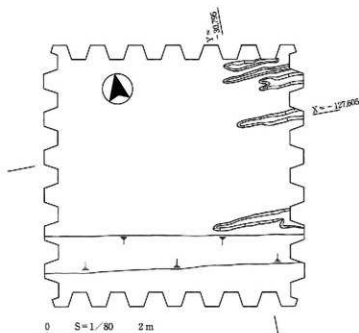


図6 2 トレンチ第Ⅲ-2面平面図

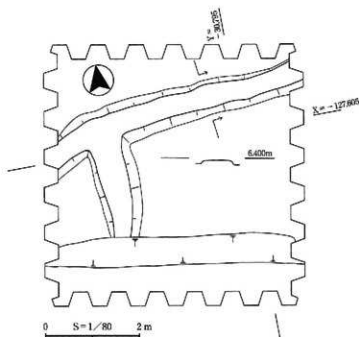


図7 2 トレンチ第Ⅲ-5面平面図

3.3 トレンチ

3 トレンチは、調査区北西隅に位置する。

第Ⅰ層 (T.P. +7.35~7.80m) 暗青灰色粘質土層。第Ⅰ-1面では東西方向にのびる畝溝が見つかった。この第Ⅰ-1層を除去した第Ⅰ-2面では人間の足跡、第Ⅰ-3面では東西方向に伸びる小溝2本を検出した。この小溝は、幅約20cmである。耕作にともなうものと考えられる。

第Ⅰ層からは、近代の陶磁器・瓦・土師器の細片が出土した。図12-5は19世紀の茶釜の蓋である。ほかに天目碗・瀬戸美濃折縁皿、白磁がある (図版4-20~22)。1・2 トレンチと同様に近現代の耕作土層である。

第Ⅱ層 (T.P. +7.00~7.35m) 灰色・明黄褐色細砂~小礫の砂礫層と、シルト層で形成される洪水堆積層である。ここでも、最下層にラミナがみられるシルト層があり、その上層に砂礫層が堆積しており、2~3単位に細分できそうである。また1・2 トレンチに比べ、堆積の厚さが半分ほどしかない。トレンチ西半分では発達した斜交層理がみられる。

第Ⅲ層 (T.P. +6.35~7.00m) 青灰色砂質土と灰色粘土層。第Ⅲ-1面では、偶蹄類の足跡痕や粘土ブロックがトレンチ全体でみられ、この層が耕作土層と考えられた。この耕作土を除去する途中で、東西方向の畦畔を検出した。しかし、トレンチ南東隅で検出したため、幅などは不明である。耕作土から次のような陶器類が出土した。瀬戸美濃天目碗は、口縁部が玉縁になっており、16世紀中頃から後半の所産である (図12-6・図版4-23)。青磁碗は、口縁部外面に崩れた雷文が描かれており、16世紀ころのものと考えられる (図12-7・図版4-22)。

第Ⅳ層 (T.P. +5.00~6.35m) オリーブ灰色シルト層。第Ⅳ-1層は、第Ⅳ-2層を授拌したもので、一部に細砂ブロックが混じっており、人為的に改良した可能性がある。第Ⅳ-1面ではト

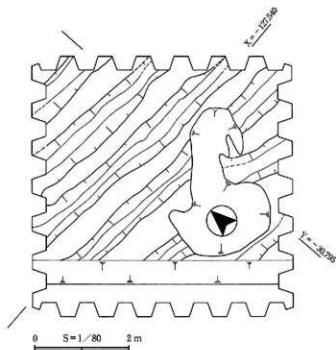


図8 3 トレンチ第Ⅰ-1面平面図

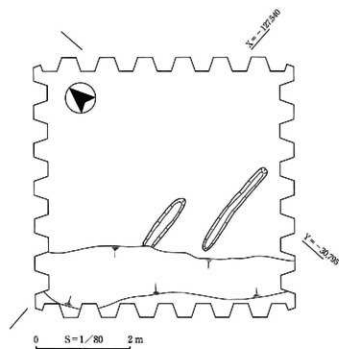


図9 3 トレンチ第Ⅰ-3面平面図

レンチ北隅で南北方向の溝を検出した。この溝の埋土は上層のⅢ-5層と同一である。Ⅳ層からは、中世前半までさかのぼるとされる土器が細片で出土した。

第4節 表採遺物

ここでは、現場近辺でおこなった表採の成果について記述する。表採した場所は現在ゴルフ場がある地域の河川敷で、穂谷川から船橋川の河口付近まで、ほぼ600mの距離である。このあたりは淀川河床遺跡(その1)の範囲内に相当する。

表採した遺物のうち、実測が可能なものを図13に掲載した。8は弥生土器の壺・甕類の底部である。9も弥生土器で、直口の頸部をもつ壺であろう。頸部の付け根に突帯を貼り付けた痕跡がある。10は瓦器皿である。見込み部にわずかな圏線状ミガキと、底部内面にジグザグ状ミガキがみられる。11は染付け碗で、いわゆる「くらわんか碗」といわれるものである。12は関西系陶器行平の壺である。

表採遺物は、合計数十点あり、大半が中近世遺物である。古代以前の土器は少なく、須恵器に関しては1点も収集できなかった。

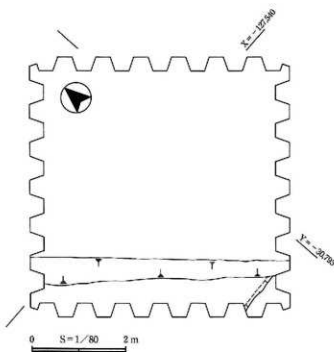


図10 3トレンチⅢ-1面平面図

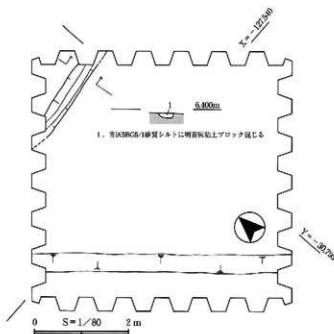


図11 3トレンチⅣ-1面平面図

参考文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
 田口昭二 1983 『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニュー・サイエンス社
 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』平凡社
 真鍋篤行 1992 「瀬戸内海地方の製漁業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』瀬戸内海歴史民俗資料館

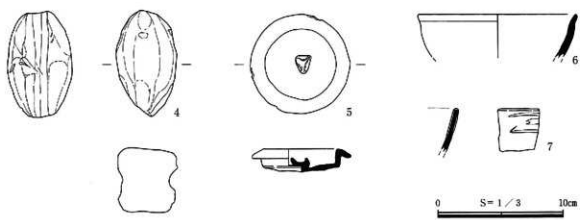
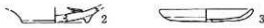


図12 出土遺物

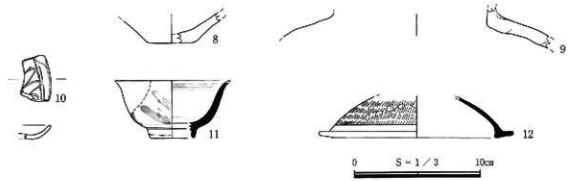


図13 表探遺物

第3章 まとめ

今回の調査は、確認調査であったため、限られた範囲内の調査となった。しかし、調査結果から、中世以降における周辺の土地利用の変遷が明らかになった。

最下層となった第Ⅳ層は、シルトを主体とする自然堆積層であった。これは各トレンチに共通する。部分的に生痕がみられたが、植物遺体などはまったくなく、この層が水中で堆積されたものであることがうかがえる。出土遺物は、厚ぼったい口縁をもつ瓦器碗や黒色土器が散見しており、中世前半までを想定できる。したがって、すくなくとも12世紀ころまで、周辺は沼沢地が広がっていたのであろう。この層は厚さが1m以上あり、さらに下層へ続くと思われる。古代の遺物はまったく出土しなかったため、いつごろからこの堆積層が形成されたのか、はっきりしない。いずれにしろ、古代およびそれ以前の遺構が存在する可能性は低いものと考えられる。

調査地周辺は、淀川・穂谷川の氾濫原にあたり、しばらく沼沢地の状態が続くが、中世以降乾燥地化したようである。第Ⅲ層では、供給された土砂に改良を重ね、耕作地として開墾をすすめた状況がうかがえる。2・3トレンチでは、溝や畦畔など耕作に伴う遺構が見つかったほか、牛などの足跡が確認できた。1トレンチでも、人為的に改良を加えた痕跡があるが、耕作地として利用し続けることができず、自然堆積が続く。しかし、この場所への土砂の供給は続き、耕作面は5～6面を確認することができた。この最上層である、3トレンチ第Ⅲ-1層耕作土からは15世紀後半の陶磁器が出土しており、中世後半まで耕作地として利用されていたのであろう。また、当時の条里が正方位に沿うものであることがわかった。

その後、洪水堆積層が厚く堆積する。この堆積層は2～3の単位に分けることができた。このうち、1トレンチの第Ⅱ-2層は堆積状況から破堤堆積、この上下の層は氾濫堆積であると考えられる。2・3トレンチでも同様の堆積状況で、土壌化が進んでいないことから、短期間で堆積したのと考えられる。この時期は、第Ⅲ層と、第Ⅰ層の出土遺物により、中世後半～江戸時代に位置づけられるが、一時的な洪水によって多量の土砂が運搬されたことは、注目される。しかし、今回の調査では、この土砂を運んだのが淀川であるのか、穂谷川であるのかは、明確にできなかった。今後の課題である。

第Ⅰ層の状況から、再び耕作地として利用されたことがわかる。くらわんか碗や十人形など江戸時代中期以降の遺物が含まれることから、土地が安定し、耕作地として利用された様子がうかがえる。さらに、堆積層の厚さを比べると、以前より土砂の運搬量が減っているのが明らかである。つまり、近代技術の進歩によって河川改修が進み、以前のように多量の土砂流出がなくなった背景が、ここに垣間見えそうである。

本文を執筆するに当たって、当センター技師 井上智弘・信田真美世、専門調査員 宮田佳代・小澤晃子から教示を得ました。

報告書抄録

ふりがな	よどがわかしょういせき(その1)						
書名	淀川河床遺跡(その1)(確認)03-1						
副書名	牧野北町地区淀川高規格堤防整備事業に伴う埋蔵文化財(確認)発掘調査報告書						
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第104集						
編著者名	辻本 武、小野 亜由美						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 Tel.072-299-8791						
発行年月日	2003年10月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
よどがわかしょういせき 淀川河床遺跡 (その1)	ひらかたしまさのきたまらちまき 枚方市牧野北町地先	27210	13	北緯 34°50'45" 東経 135°40'00"	2003.6.18 ～ 2003.9.30	75 ㎡	淀川高規格堤防 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
淀川河床遺跡 (その1)	散布地	中世後半～近世	溝・畦畔	土師器・瓦器・陶磁器 土錘・土人形			



1. 調査地全景



2.1 トレンチ第I-1面 (北から)



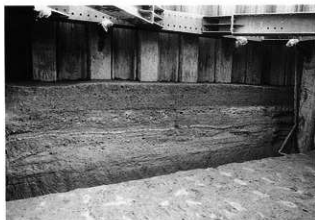
4.1 トレンチ第I-2面 (北から)



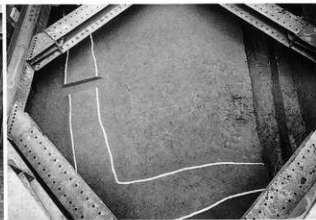
3.1 トレンチ第II層断面 (北東から)



5.1 トレンチ第IV層断面 (北東から)



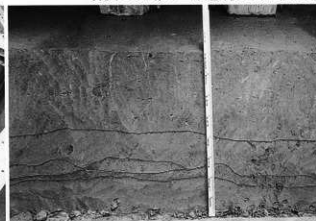
1.2 トレンチ第II層断面 (北東から)



3.2 トレンチ第III-5面畦畔検出状況 (西から)



2.2 トレンチ第III-2面溝完掘状況 (西から)



4.2 トレンチ第IV層断面 (北から)



5.3 トレンチ第I・II層断面 (北東から)



7.3 トレンチ第III-1面畦畔検出状況 (北から)



6.3 トレンチ第III-1面足跡 (拡大)



8.3 トレンチ第IV層断面状況 (北東から)



1(1)

1.1 トレンチ第I層出土 土人形



2



3



8



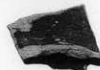
9



4



10



11



5



6



7(2)



12



13

2.1 トレンチ出土遺物 (2~4: 第I層、5~7: 第III層、8~13: 第IV層)



14(3)



16



17(4)



15

3.2 トレンチ出土遺物 (14: 第III層、15~17: 第IV層)



18(5)



19



20



21



22(7)



23(6)



24

1.3 トレンチ出土遺物 (18: 第I層、19~21: 第II層、22~24: 第III層)
2. 表探遺物



25(9)



26(8)



27



28(10)



29



30(12)



31



32(11)

(財)大阪府文化財センター発掘調査報告書 第104集

淀川河床遺跡(その1) (確認) 03-1

—牧野北町地区淀川高規格堤防整備事業
に伴う埋蔵文化財(確認)発掘調査報告書—

2003年10月31日 発行

編集発行/ (財)大阪府文化財センター

〒590-0105 堺市竹城台3丁目21番4号

印刷/ 株中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
